

無気力令息に転生したら、
過保護に甘やかされています

登場人物紹介

Characters

ゼオン

エリュースト伯爵。
ルシオンの父親で、かなりの過保護。

エドワルド

ルシオンの主治医。愛想はないが、
患者思いの良い医者。

ルシア

ルシオンの母親。基本優しくおっとり
しているが、怒ると怖い。

Mukiryoku reishoku ni Tensei shitara
Kahogo ni Amayakasareimasu

エイデン

第二皇子。冷たく素っ気ない態度を
とりがちだが、本当は優しいツンデレ
タイプ。原作小説ではユリスを奪い
合うキャラクターのひとりだが……？

リッツェ

ルシオンのお世話役。
魔塔主の一番弟子。

ユリス

エリュースト家で保護されている少年。原作小
説の主人公で、並外れた魔法の才能がある。
警戒心が強いが、ルシオンに対しては甘えたがり。

ルシオン

BL小説「愛されすぎて正直だるい」
の中で悲劇の死を遂げる令息に転
生した超マイペースな元日本人。
のんびりな性格は異世界でも相変わ
らず。しかし、なぜか主要キャラ
クターたちが集まってきて……？



プロローグ

——無気力系主人公。

物語の主人公という名誉ある役ながら、気力・活力を持ち合わせておらず、その特異性が逆に主人公としての価値を高めているという非常に難儀な存在だ。

無気力であるが故に達観していて、危機的な状況も顔色一つ変えずに打破してしまう。

根拠のない精神論を嫌い、熱意だけではどうにもならない現実世界を生きている現代人にとって、無気力なままで物語の中心に立つ彼らは、熱血ヒーローにも引けを取らない魅力をまとうていた。

かくいう俺——天瀬^{あませ}夕^{ゆう}の姉も、そんな無気力系主人公に惑わされた一人だ。

『無気力系主人公＋総受け属性Ⅱ神作。この公式に間違いはないわ。数多くの同志達を創り上げてきたの。つまり、腐女子の人口増加によって経済の活性化に大きく貢献しているということで、無気力系主人公の総受けは世界を救うといっても過言ではない！』

トレードマークの眼鏡を怪しく煌めかせながら、驚くほど饒舌に語る姉ちゃんの姿が脳内に浮かぶ。あまり会話が得意ではない姉ちゃんがはつきりとした滑舌で、早口言葉を読み上げるかのよう

に迷いなく述べるので、やけに記憶に残っている。

俺はそんな姉ちゃんですら辟易するほどの度を越えた『無気力人間』だった。

この表現でいけば、それこそ物語の主人公にでもなりそうな特別な何かを持っていいそうだが、非常に残念ながら現実では単なる面倒くさがり屋と表現される。

そんな俺は、十六という若さで世を去った。

そして……転生した。

「坊ちゃまーっ、お願いですからそろそろミルクを飲んでください！ お腹空いたでしょう？ 飲まなければ大きくなれませんよ!?」

「……………（むり、だるい、めんどくさい）」

無気力系主人公が総受けのBL小説『愛されすぎて正直だるい』のモブキャラ——ルシオン・エリューストに、無気力系主人公オタクの姉ですら辟易するほどの無気力な俺が、だ。

与えられたばかりのまっ白な人生。前世での経験。おぼろげではあるが、先の展開を知っているというメリット。

これらを最大限利用して前世とは違う熱く心震えるような日々を送ってみせる！

……………なんて決意は当然毛ほどもなく。

第二の人生か。物語で言えば、完結後の番外編みたいなものだよな。

姉ちゃんが言うには、番外編には本編のようなハラハラする展開ではなく、ほのぼのとした日常風景が描かれることが多いらしい。

それが逆に読者の癒やしとなり、本編に劣らない人気が出るパターンもあると言ってた気が……

ほのぼの。日常……

つまり今世は前世以上に無気力に生きていいのか。小説は本編の真っ最中だとしても、俺にとっ
ては番外編みたいなものなんだから。

第一章 本物の無気力は親不孝？

ある程度の物事を自分でこなせるようになったとき、誰もが一度は考える。

『赤ちゃんだった頃に戻りたい。なんでも他人にやつてもらえて、そこにいるだけで褒められたあの頃に』

——あれ、俺赤ん坊になってる？

意識が芽生えた瞬間、そんなことを考えるくらいには前世の記憶を覚えていた。

戻っていたというより、新たにまったく別の人間として生を受けたと言った方が正しいか。

詳細は覚えてないが、娯楽費は自分で稼げるくらいの大人に近づいていたこと、死んだこと、常識、言葉、それから姉ちゃんとの会話。曖昧だが、妄想でもなんでもなくなつたしかな前世の記憶がある。

だが、この世界は俺の知る世界とはまた別のものらしい。名前や容姿、生活習慣に馴染みがないだけでなく、ほかに前世の言葉で言うファンタジー要素をいくつか見つけた。

そんなことで驚くのも悩むのも面倒くさい。そんな暇があるなら、この限られた赤ん坊^{合法ニートタイム}の時間を堪能したい。

いずれにせよ、寝ているだけでよかったあの頃に戻りたいと嘆いている人々よ、知っているか？

赤子の生活というのは……

この上なく素晴らしいものであるぞ！

「坊ちゃん、さすがにそろそろ起きませんか？ 赤子はよく眠ると言いますが、続けて十五時間も寝るのはどうでしょう」

元々浮かび上がりかけていた俺の意識を覚醒させたのは、一人の男の懇願する声だった。

「お腹が空いても泣き声をあげないのはおかしいですよ？ お問い合わせすから早くお目覚めになつて、その愛らしい瞳を僕に見せてください」

別にそれに応えたわけではないが、たしかにお腹が空いていたので目を開ける。

「うわあああ！ 起きた！ 起きたぞー！ このリツツエがついにやりましたよー!!」

目覚めた赤ん坊を放ったらかしてガッツポーズを決めているこの男は俺の世話係。

動物の短い尻尾のように毛先をピョコピョコと跳ねさせ、似合わない執事服を身にまとつて（一応）誠心誠意全力で俺を育ててくれている。

「いやー、そろそろ起きると思つてたんですね。ほら見てください、ミルクがちょうどいい温度になつてます」

……見ても温度はわからんやろ。という感想はどうせ言葉にはできないので、心の内に留めておく。仮に喋れる状態であつたとしてもツツコミのために口を開く気力はないが。

「赤ん坊って起きたら泣くイメージがあつたんですけど、坊ちゃんはまだ泣かないですよ。

お腹が空いても泣かないし、育児書は役に立たないって本当なんだな」

リッツェは慣れた手つきで俺を抱き上げると、口元に哺乳瓶を当ててくれる。

見た目も言動も子どもっぽいこの男に本当に育児なんてできるのかと疑ったときもあったが、意外にも手際はいいし、かなり真面目に育児の勉強をしているようだ。

俺の快適な赤ん坊ライフに大きく貢献してくれている。抱っこも安定していて心地よくて……いかな。また眠たくなってきた。

「は！ またミルクが減つてない！ もー、坊ちゃま！ ちゃんと吸ってくださいよ。お腹が空いて起きたんじゃないんですか？ 飲まないと気持ちよく寝られませんよ。ほーら、僕のお口を真似してください。チュー、チュー」

俺が再度舟を漕ぎ始めると、リッツェの成人男性にしては高めの声が遠慮なく部屋に響いた。腹が減っては快眠はできぬとよく言うので仕方なくミルクを吸う。これ意外と疲れるんだよな。

「よ！ さすがは坊ちゃま！ ハイハイもつと？ ハイハイ飲んで？ 鼠ねずみのお口でチューチューチュー！」

これはリッツェのオリジナルだろうか？ それともこの世界の赤子向けソング？

どちらでもいいけれど、その声量で歌ったら普通の赤子だったら号泣している。お世話してもらい立場で言うのは気が引けるが、君のお坊ちゃまが前世の記憶持ちであることに感謝してほしい。

リッツェの歌に急かされながらも自分のペースでミルクを飲み切った俺は、きっちりゲップをしたことで再び眠る権利を手に入れた。

「ええー、坊ちゃままた寝るんですか？ もっと構ってくださいよ。せつかく坊ちゃまの世話係に任命されたのに、坊ちゃまがあんまりにも大人しいので僕もう暇で暇で……」

何か世話係らしからぬことを言っている。これ以上耳を傾けると、声に出さずとも心の中でツッコんでしまい体力が削られるので、目を瞑ってシャットアウトする。

「……………すうー、すうー」

「あー！ 結局また寝てしまった！ ……まあ、可愛いからいつか！」

とある日の深夜。

「やっぱ病気ではねえよな。原因もなくこれだけ眠る方が怖いが、病じゃないんだからほうっておいていいのか？ いやでもそれだと栄養がな……」

瞼を閉じたまま意識だけが浮上する。

誰かがすぐ側で長々独り言を言っていた。リッツェの騒音とは明らかに違う、大人の男の低い声だ。

声の主が気になって目を開けてみると、荒い口調から想像される人物像とはかけ離れた美人さんが眉間に皺を寄せて考え込んでいた。

胸まである長い髪を右耳の下でまとめており、浮いた喉仏と太い骨に気づかなければ、鋭い雰囲気
気の女性と勘違いしていたかも。細縁の眼鏡がよく似合う気品溢れる男性だ。

「……起きてる」

……うん。起きてるよ。

返事の代わりに瞼を二回ほどパチパチしてみる。

「呑気な顔しやがって。こっちは君のせいで毎日気が気じゃないんだぞ。ったく、医者泣かせの子どもだな」

……この人お医者さんなんだ。白衣ではなく茶色のベストと細身のスラックスを組み合わせている。こっちの世界の医者は白衣じゃないのかな。業務時間外だから着てないだけ？

「……はあ。こんな子どもに文句言ってどうすんだ」

お医者さんは自分に呆れたように眉間を揉んだ。なんだかお疲れの様子。よく見ると眼鏡のフレームの陰に隠れて隈がある。

これってどう考えても俺のせいなんじゃ……いや。いやいやいや。俺はこの限られた合法二トタイムを全力で満喫すると決めたんだ。一度決めたことをそう簡単に覆すわけにはいかない。「おーい、聞こえるか？」

……ウンウン。聞こえます。

「こっちを見るってことは耳は聞こえてるよな。目も見えてる。じゃあほら、今度は泣いてみるのはどうだ？ お腹も空いてるだろ。泣かないと伝わらないぞ」

それはちよつと難しい。泣くのは疲れる。

「やっぱ発声に何かあるのか……」

不意にお医者さんが俺の喉元に手をかざした。そこだけ太陽の光が当たっているみたいにポカポ

カと温かくなる。

「反応なしか。まさか○歳児にしてストレスで声が出ないなんてないよな」

ほええ。今のつてファンタジー的なあれでは？

そんな世界だとは思っていたけど、まさか魔法も存在するなんて。もう一回やってくれないかな。「なんだその強請るような目は。なあ、初めて見る奴が目の前で怪しいことしてんだぞ。怖いだろ？ 泣かないと誰も助けに来てくれないぞ」

お医者さんはそう言うのと、突然俺の鼻をつつく。

「ほら。泣いてみる」

泣かせるためにわざと意地悪してるな。綺麗な顔してかなりいい性格してるよ。

「坊ちゃまが起きた予感……!!」

開け放たれていた扉から猛スピードでリッツェが入ってきた。その手には哺乳瓶が握られている。リッツェは最近俺の睡眠周期を的確に読めるようになってきている。まさかこれも魔法なのか……

「あれ、エド先生！ こんな時間にどうされたんですか？」

「こんばんはリッツェさん。夜分遅くにすみません。どうしても起きた状態のルシオン様を診察しておきたかったのでお邪魔してしまいました。旦那様には許可を得ておりますので」

お医者さんはいつの間にか俺の鼻から手を離していた。

喋り方は堅苦しすぎて愛想がない。その上無表情すぎて感情がまったく読み取れない。しかし口調は丁寧で、わざわざリッツェに頭まで下げた。

柄の悪さをうまいこと隠している。これじゃただの美人さん。

ふ、俺がベビーだからって油断したな。君の本性は、このむにむにのお手々に握らせてもらっただけ。

「それはありがたい！ どうでした!? うちの坊ちゃまどこも悪くないですか?」

「呼びかけには反応してくれますし、今のところ健康に問題はないかと。ただ、年齢の割に眠りが深すぎるのが気がかりではあります」

「やっぱり変ですよ!? 大声出しても振り回しても起きないんですよ!」

「ふ、振り回す……?」

リッツェの常識外れな発言にエド先生も目を丸くしている。

実際に、この間リッツェは俺を抱つこした状態でグルグル回転していた。一瞬意識が浮上したんだが、きちんと両腕で抱えてくれているのが確認できたのですぐに二度寝したのだ。

「とりあえず病気じゃないならいいんですけど……はあ、心配だなあ」

リッツェは眉尻を下げる。

安心してくれ。前世の記憶を持つ特殊な赤子ではあるが身体は正常だ。

それにしてもここまで心配をかけてしまうとさすがに罪悪感が湧く。ニート生活も難しいな。誰にも心配をかけずにぐーたらする方法はないものか。

「ご安心ください。ルシオン様のことは私もできる限り側で見守っていきます」

「わあ！ エド先生がいれば心強いです!」

「それでは、今日のところは失礼しますね。また明日伺います」

「はい！ お願いします!」

ふむふむ。エド先生はずいぶん信頼が厚いみたい。

つまりエド先生の診察を受ければ、リッツェも安心してわけだな。これからは先生の診察だけは真面目に受けよう。無気力であるためにはどんな努力も惜しまない。

「大切なことを忘れていました」

すでに半分背を向けていた先生は振り向くと、再度俺の顔を覗き込む。

「ルシオン様、エドワルドと申します。一応医者です。……どんな病気も治せるよう手を尽くしますので、どうぞ頼りにしてください」

優しく寄り添う言葉とは反対に表情に温かみはなく、リッツェのようにスキンシップでの愛情表現をしてくれるわけでもない。だけど眼鏡の奥にある先生の目がどこか切なげで、皮を被った悪人が適当に言葉を並べているわけではないとはわかる。

わざわざ深夜に一人で診察して、リッツェが来た途端、余裕溢れる医者らしい振る舞いをする。

皮は皮でも、患者とその家族が不安にならないための分厚い皮。ずいぶん頼りになるお医者さんだ。

赤ん坊になってから新しい両親に会うまで、正確にはわからないがかなりの日数があつた。

その上いつも自分を世話している男はどう見ても赤子を育てるにはまだ若い青年で、性格もかな

り変わっている。

故に新しい親は自分にはまるで興味がないのではとふと考えたときもあったのだが、それはまったくの間違いだったとすぐに気づかされた。

「あらー、やっと起きてるルーたんに会えたわ」

目を開けると女性の顔があった。緩くカールした白金の髪が、カーテンの隙間から差し込む陽の光に当たり輝いている。瞳の见えない垂れた糸目とおっとりとした雰囲気相まってかなり幼く見えるが、直感でわかった。

この人、俺の母親だ。

初の対面だというのに感情の高まりがなくゆったりとした声音は、やはり俺の予想が正しかったということである……

「ルーたん、お母様よー。いつ来ても寝てるなんてさすがは私の息子よねえ。私も昔は一日中日向ぼっこしていたのよ？ それにしても、目の色はお父さんそっくりだったのねえ。血みたいな赤色。とっても怖くて素敵だわー」

「本当ですね！ さすがはお二人のお子様です！ 寝てても可愛いですが、目を開けると旦那様の要素が加わって可愛らしさの中に茶目つ気が生まれてもう完璧！」

「ねえ、あの人を呼んできてくれる？ あの人、ルーたんが自分の前で目を覚ましてくれないのは俺が怖いからなんじゃないかって、いらぬ心配ばかりしてるのよー」

「はい！ すぐに！」

……あ、俺が寝ただけか。

母親と付き人らしき女性の会話を聞いて、自分がいかに親不孝だったのか自覚した。どうやらこの方はこれまでも俺に会いに来てくれていたらしい。

言われてみれば一日のほとんどを寝て過ごしている。俺の眠りが深すぎるばかりに起きた息子に会わせてあげられなくてごめんよ母さん。

「まあ、私を見るわねー。うふふつ、私に似てとっても可愛いわー」

細い指が俺の頬を突き刺す。ふむふむ。苦しゅうないぞ。

片手を自分の淡い桃色の頬に添え、もう片方の手で俺の頬を触り続ける母さん。どうやら見た目と同じで性格もかなりおっとりしているようで、話し方にもそれが表れている。

いつもリッツェの慌ただしい独り言を聞いているからかものすごく安心する。それとも母親。パウーだろうか。

「ルシオン!! 起きたのか!!」

まるで長年目覚めなかった恋人がようやく目を開けたような、切羽つまった叫びだった。額に汗を滲ませた野獣……ケホンッ、おそらく父親が顔を覗き込んでくる。

「本当に起きている……よかった……」

母親と正反対の反応。顔をクシャクシャに歪ませてボタバタと大粒の涙を零す姿は、獣を連想させる筋肉質な身体つきと厳つい顔にはあまり似合わない。

それでも変に気取らない素直な反応はかなり好感が持てるぞ。

「だから言ったでしょう？ ルーたんは私の息子なんだから、あなたの強面だつて好きになるに決まってるのよー」

……母さん、さつきからゆったりした口調で毒吐いてるなあ。

「そうか？ それならいいんだが……。ルシオン、俺が怖くないのか？」

父さんは太い眉を下げて聞いてくる。

血のように真っ赤な髪と瞳。皮膚が張り裂けんばかりに張った筋肉。左目は縦に切り傷が入つていて威圧的な容姿をしている。

子どもに嫌われないかと心配になるのもわからなくはない。実際、普通の赤ん坊が見たら怖がる可能性の方が高いだろう。

でも俺は赤ん坊にしては精神年齢がかなり高いし、何かに怯えて過ごす体力もないので正直杞憂だ。

「……」

「な、何も言つてくれない。やはり嫌われてるのか？」

「ご安心ください！ 坊ちゃまが喋らないのは今に始まつたことじゃないですから！」

無駄にでかいこの声。そして両親よりも俺を知り尽くしているという自信に満ち溢れた発言。

顔を見なくともわかる。リッツェだ。

「坊ちゃまー、ミルクをお持ちしましたよ。今日もちゃんと飲んでくださいね。旦那様、坊ちゃまは雷や強風の音も怖がらないじゃないですか。奥様のおっしゃるように心配なさる必要はないと思

います！」

「はあ、そうか。よかった……」

そうそう。リッツェの言う通り。気にしないで。喋らないのは口を開くのが面倒なだけだからさ。「あらあら、リッツェはルーたんを本当によくわかつているわね。ルーたん、リッツェのお世話はどうか？ 快適でしょう？」

なるほど。リッツェを俺のお世話係に任命したのは母さんか。母さん見るからに天然そうだな。でもまあ声量と発言以外はたしかに快適。飲み込みが早いらしくメキメキ育児の腕を上げている。

「あー！ 坊ちゃまー！ なんて飲んでくれないんですか!? 温度はちょうどいいはずですよ！

ほら飲んで！ 飲んで！ 飲んじやつて！ ハイ！」

「その歌は何かしら？」

「坊ちゃまつて全然ミルクを飲んでくれないんですよ。ただでさえ起きないから栄養不足なのに。そこでこの歌です。この歌を歌うとあら不思議。すぐにミルクを飲み始めるんです。良ければ奥様と旦那様と侍女さんも一緒に！」

「「ほら飲んで！ 飲んで！ 飲んじやつて！ ハイ！ 飲んで！ 飲んで！ 飲んじやつて！」」

いやうるさいって……。飲むから静かにして。

「おお！ 本当に飲んだな！ すごいぞリッツェ！」

「へへっ、それほどあります！」

調子乗んな。と言いたところだが、度を越えた面倒くさがり屋の俺にミルクを飲ませるなんてリッツェの育児の腕は、俺が思っている以上にすごいかもしれない。

第二章 本物の無気力は主人公に『無気力』を伝授する

『無』というのは、こういうことを言うのだろう。

物はもちろん色も音も風もない、あるのは自分の意識だけ。

浮いているような、沈んでいるような感覚に酔いしれていると、空気を読まないよく通る声がせつかくの心地いい空間をぶち壊した。

「お主、一体どれだけの時間を無駄遣いすれば気が済むのじゃ？ いい加減生命力を消費してまともに生きよ」

幼くも貫禄のある不思議な声音だ。神様ごっこをしている少女みたいなわざとらしい喋り方がよく似合っている。

「聞こえているじゃろ？ 返事をせんか。おい、おい！ おーい！」

姿を見せずに声だけが聞こえてくる奇妙な状況。これは絶対普通じゃない。かなり厄介なやつだ。面倒ごとには関わらないのが一番。というわけで、俺は再び眠りにつくことにした。

「無視するでない！ 寝るでない！ ふざけるでない！」

俺は決してふざけてない。ただいつだって真剣に無気力を全うするだけだ。

「やっと起きたー！」

目を覚ますと、上等な布と綿^{わた}で作られたカーペットの上だった。

生まれてから早二年半。ベビーベッドを卒業させられた俺は昼になると、こうして床に放り出されるようになってしまった。

「ほーら、立つ練習をしましょう。坊ちゃまならできるはずですよ！ 先生もお肉が足りてない以外は健康そのものだから練習すれば必ず歩けると言っていました！ 自信持っていきましょう」

リツツエは寝転んだままの俺を無理矢理座らせると、両手首を掴んで優しく上に引っ張る。そうしてそのまま俺の身体は宙に浮く。さながら宇宙船に吸い込まれていく地球人だ。

「坊ちゃま違います！ 足をつくんです！ ほら、床にペタッと置くんですよー。ほーら」

足の裏にカーペットが当たるが、力を入れていないため当然立てない。

「くっ、惜しい！ 惜しいですよ！」

自分で言うのもなんだが、全然惜しくない。そもそも立つ気がないのだから惜しくなるはずがない。

一年とちよつと前、あまりにも同じ体勢でいすぎて身体が痛み始めたため、仕方なくお座りを解禁した。しかしそこからなんの成長もなく、ハイハイもしないので、リツツエはいよいよ本気で訓

練させ始めたのだ。

ちなみにエド先生のおかげで健康体なのは確認済みのため、母さんは『のんびり屋さんなのねー』の一言で済ませてくれた。やはり母親。息子のことをよくわかっている。

「うーん。それじゃあお外にでも行きましようか？ 坊ちゃま日向好きですし」

日向ぼっこ!! それは俺が前世からずっと愛してやまないものである！

体温の高い子どもの身体で陽の光を浴びると、本当に暖かくてぐっすり眠れる。つまり至高。日向ぼっこ以上に俺に向いている遊びはない。

「こんなときだけ目を輝かせるんだから。坊ちゃまってのんびり屋さんじゃなくて、面倒くさがり屋なだけだったりして」

ギクリ。

「まあいつか。とりあえず行きましょ。ほーら、立つてくださーい」

両手首を再度掴んでもおもしろくない冗談を言うリツツエを、無言で見上げる。数十秒も見つめ合うと、リツツエはあっさり負けを認めて溜息を吐きながら俺を抱き上げた。

そうして、すっかり安心する場所になったリツツエの腕に収まったまま外へ向かう。

「坊ちゃまよ！ 今日可愛いー！」

「きゃー！ 今、私の方を見たわ！」

「違うわ私を見たのよ！」

途中ですれ違った三人組のメイドさんは清掃やお茶出し、買い物など様々な仕事をこなしている。

そして俺に会うたびに毎回甲高い声をあげる。この屋敷の人達は、赤ちゃんは大きな音で泣くという思考がないんだろうな。第一子が俺だったのが運の尽きか。

ちなみにほかには母さん付きの侍女、父さんの補佐をしている秘書なのか執事なのかよくわからん男の人、それから庭師と料理人が一人ずつと、皆さんお馴染みのリツツエがこの屋敷で働いている。二年経って会ったのが彼らだけなのでおそらくこれで全員。

これが多いのか少ないのか定かではないが、前世で至極平凡な家庭の子であった俺には十分すぎるほど贅沢に感じる。

「では坊ちゃま、今日はここで立つ練習をしましょうね」

そう言っただけで下ろされたのは庭園の一角にある芝生エリア。側には大きな木が一本立っていてちやうど良く日陰がある。二歳児一人が遊ぶのには十分すぎる大きさのシートが敷いてあり、足を汚さず立つ練習ができる。しないけど。

草むらで寝そべるのも好きだが、せっかく用意してもらっているので大人しくシートの上に留まっておこう。わざわざ動くのも面倒だしな。

一向に練習を始めずに、あろうことか寝そべろうと身体を倒す俺に、リツツエが頭を抱えて唸り始めた頃、外出していた父さんが帰ってきた。

どことなく見覚えのある、一人の男の子を連れて。

「ここにいたのかルシオン。搜したぞ」

「旦那様！ お帰りなさいませ！」

俺の顔くらいなら簡単に掴めそうな大きな手で、男の子の小さな手を握っている父さんはあいかわらず感情が漏れで、今まさに寝転がった俺の側に座ると鼻先をツンツンしてくる。

初めは誤って傷つけるのを恐れて触れるのをためらっていたのに、今は隙あらば触れようとしてくる。いい変化だよな。幸い力加減はちゃんとできている。

「さっき話していた息子だ。ルシオンといって、今年で三歳になる。仲良くしてやってくれ。ルシオン、この子は当分一緒に暮らすことになったんだ。同年代の子に会うのは初めてだろう？ いろいろ教えてもらおうといい」

父さんが繋いでいた手を離しても、その子は大人しくその場に立っていた。というより、どうすればいいかわからず立ち尽くしているように見える。

何歳だろう。五歳？ 六歳？

目を覆うほど伸び切った髪はボサボサで、寒い場所にいたのか手の先が乾燥して真っ赤になっている。服だけ整っているのは、ここに来る前に父さんが着替えさせたからだろうか。

いずれにしても素性を紹介しないというのは何か訳ありに違いない。

「ルシオン……」

父さんの言葉をただ繰り返したのだろう。男の子が感情のない声で俺の名前を呼ぶ。

癖のない黒髪が風で揺れた。長い前髪に隠れていた濃紺の瞳は深海を思わせる冷たさとおおらかなさをまとっている。

やっぱどこかで見たことがあるような……………

そこまで考えて慌てて思考を停止する。なんかよくわからんけど、無駄に頭を使うと疲れるので、今はとりあえず日向ぼっこを楽しみたい。

重い身体を動かしてなんとか上半身を起こし、短い腕を伸ばして男の子の手首を掴んだ。そのまま引つ張って隣に座らせる。

うん。俺にしては頑張った。よし寝よう。

どうすればいいかわからず明らかに戸惑っている男の子には申し訳ないが、しばし眠らせてもらう。

だから君も一緒にのんびり眠ろう。そんなふうに硬く身構えていたら無駄に体力を使うだけだぞ。……と、声を出す気力はないので心の中で呟いた。

同居人が一名増えてから十日ほど経った。

実は父さんの隠し子なのではと疑っていたが、母さんの様子が変わらないのを見るに違うらしい。うちの権力図は体格に反比例しているため、頂点は俺。次に母。使用人。最後に父さんである。もし隠し子なんて現れようものなら、父さんはこの屋敷にはいられなくなるであろう。

「……」

「……」

そして俺は現在いつもの芝生エリアにて日向ぼっこに勤しんでいた。隣にはあいも変わらず何を考えているのかよくわからない新・同居人もいる。

常に張り付いていたリッツェは別の仕事で席を外していて、辺りには穏やかな空気が漂っていた。今日だけではなく最近は何やら屋敷内が慌ただしい。そのため、こうして二人きりになることが多かった。

「……」

「……」

俺が言うのもなんだが、この子は年齢的に遊びたい盛りのはずなのに、時折呼吸を確かめなくなるくらいに大人しい。

日向ぼっこも、リッツェが連れてきただけで自分の意思でここに来たわけではないようだ。とはいえ嫌々といった様子はない。彼はどこにいても膝を抱えて空気を見つめているので、その場所が屋内から屋外に変わったとしても関係ないのだろう。

それにしても……………

閉じていた目を薄く開けて、長い前髪の隙間から覗く綺麗な顔を盗み見る。

精神年齢的には俺よりずっと幼い男の子が隈をこさえて膝を抱えている。

俺は自分が薄情者だという自覚があるが、毎日彼の隣で自分はぐっすり眠っているこの状況に何も感じないわけではなかった。

うーん。共感力がないから話を聞いたところで気の利く言葉もかけられないだろうし、そもそも俺みたいな自堕落な人間に、他人の相談に乗るなんて善行は荷が重い。

でもなんかなあ。無視するのも気が引けるといふか、とにかく今のままでは気持ちよく日向ぼつ

ができない。

そんな状態がさらに数日続いたある日、ようやくこの状況の打開策を思いついた。

考えてる間に眠りについてしまうのでこんなにも時間がかかってしまったわけだが、居心地が悪かったのは本当だぞ。この俺が陽の光の下にいて四時間しか眠り続けられなかったんだからな。

閉じていた瞼を開け、寝そべったまま男の子の服の裾を引っ張った。

今日も変わらず座って遠くを見つめていたところを、突然引っ張られて余程驚いたらしい。

男の子は綺麗な目をまん丸にしてこちらを振り向いた。

「ねう」

「え？」

「ねうの」

慣れないなりに口を動かして自分の隣をバシバシ叩く。長年喋らなかったせいか思うように舌が回らない。

「ね……る？」

「ん」

この坊主、察しがいいじゃないか。

それにしても疲れた。喋るプラス腕を振るという重労働のせいで今日の体力は使い切った気がする。

察しがいい上に従順な男の子は戸惑いながらもゆつくりとその場に寝そべった。寝転んだ状態で向き合うと自然と顔が近くなる。重力で長い前髪が下に流れて、座っているときより表情が見やすい。

「ルシオン、喋れるの？」

「なーしょ」

「えっと……ナイショ？」

「ん。だれーも、いっちゃらめ」

「わ、わかった。言わないよ」

なんだ、思ったより生き生きしてるじゃん。俺の顔をじっと見つめて舌足らずな言葉を必死に翻訳する姿は意外にもちゃんと子ども。

「いっちょにねう」

「あ……ごめんね。僕、寝るのへたくそなんだ。なんにも考えないようにしてるのに全然眠くならなくて」

男の子は視線を下ろしてなんだか悲しそう。お腹の辺りで握った両手をモジモジさせている。

てっきりクールな子だと思っていたが、自分で思考を制御していたと言う。

なるほどな。それがうまくできているのなら隈がこんなに濃くなることはない。ここはいっちょ、お兄さんが快眠するための極意を教えてあげよう。

「あのくも、とーしゃまの鼻の形してゆ」

「え？」

「あのくもはカーしゃまの手の形」

「そうなの？ たしかに手の形に似てるね」

腕を伸ばして適当な雲を指差す。同じ雲を見ているか定かではないが、子どもの遊びなんてこんなものだろう。

「あえは何に見えう？」

「なんだろう……お花？」

「じゃああえは？」

「しいて言うなら三角の形かな？」

「おにぎい」

「おにぎい？」

いかん。この世界におにぎりはないのか。

「しゃんどいち」

「サンドイッチに見える！ あ、そしたらあれは………」

そうして適当に雲の形を言っていき、瞼が重たくなってきた頃。

「ちゅぎ、あのくもは」

「うん……」

隣を見れば男の子はすでに目を閉じてうつらうつらしていた。

「なんか、急にすぐ眠たくなってきた、かも………」

雲を指差している間に仰向けになった身体を横に倒す。男の子はすでに口を開けるのも難しそう。投げ出されていた手先がまだかすかに赤い。

その手を俺はキュッと握った。俺の身体は赤ちゃん体温であつたかいからな。

手が冷えていては眠りも浅くなるとどつかで聞いたことがある。でもこの子が眠れなかったのはおそらく手先の冷えのせいではなくて。

「考えないのはだめ。どうでもいいこといっぱい考えうの。くもの形、見たい夢、明日の天気。そしたら………」

ああ、だめ。久しぶりにたくさん喋ったからか、いよいよ体力の限界が来た。やっと舌が回るようになってきたのに。でもこの眠気に抗うのは無理。今ここで寝たら絶対気持ちいい。

「そしたら、いっぱい眠くなうから」

俺にしては珍しく頑張つて最後まで言葉を紡いだとき、お互いの額がコツンとぶつかる。目を開けて見る気力はないけれど、なんとなく男の子が無事眠れたとわかる。

よかった。これで俺も罪悪感なく眠り続けられる。

それにしても二人でする日向ぼっこもなかなかいい。

手のひらと額から伝わってくる温もりが心地よくて、そんなことを考えながら今日も無事深い眠りについたのだった。

「二人ともオデコがお揃いねえー。とっても可愛いわー」

昼食の時間。父さんの膝の上で大人しくしている俺を見て母さんがクスクス笑う。

斜め前の席では、前髪をリボンで結んだ男の子が慣れないながらもフォークでサラダをつついていた。隈が薄くなった代わりにその額にはたこ焼きサイズの赤い丸がついている。

母さんの言葉を察するに俺の額にもついているようだ。

「オデコをくつつけて寝るなんて、いつの間にそんなに仲良くなったんだ？」

「……」

「ルシオンー、何か言ってくれないか？」

父さんの大きな腕の中にいると毎度眠気に襲われる。再び舟を漕ぎ始めた俺の顔を覗き込んだ父さんが返事をするよう促すが、今はそれどころではない。

そのとき、男の子の視線がサラダから俺に移った。

眠気が瞬時に引いていく。

大人びているとはいえ、まだまだ子ども。ポロツと本当のことを漏らさないとも限らない。別に少しくらい話せることがバシたところで構わないけど、永遠に会話を要求されそうであるだけ。

——ナイシヨ。

声は出ていなかったけれど、男の子はたしかにそう口パクした。前髪が上げられているからいたずらっ子みたいな笑顔がはつきり見える。

ふむ。やっぱりいい子だな。顔は綺麗だし、将来有望。それこそ物語の主人公にでもなれそう。

「旦那様ー、坊ちゃまが寝そうですよ？ ほら坊ちゃま、お願いだからちよつとは食べてください。口開けて！ ほーらー！」

側に控えていたリッツェがついに口と手を出してきた。口を開けずにいれば、すぐに諦めてくれる父さんと違い、このお世話係はしつこい。食べるまで絶対にフォークを差し出し続ける。

「はい。偉いでちゅねえ。これは一口でたくさん栄養が摂れるスペシャルミートボールだそうですよ。坊ちゃま？ もぐもぐは？ もぐもぐして？ 飴玉じゃないんですから」

もうやだ、このお世話係。無駄に目敏いし、俺を滅茶苦茶わかってきてるし。

「ほら、お兄ちゃんを見てくださいよ。ちゃんと食べてるでしょ？」

「へえ。君はフォークを使うのがうまいな」

素直な父さんがリッツェの指し示す先を目で追って感想を述べている。父さんって『あ、宇宙人！』とか言われたら真偽を疑う前に振り向いちゃうタイプだよ絶対。

「ねえー、そろそろこの子の呼び方、ちゃんと決めてあげたらどうかしらー？」

母さんの言葉を聞いて気がついた。この子、名前がないのか。そういえば皆呼び方が曖昧だったな。俺なんて男の子呼びだよ。

「俺も考えてはいるんだが、なんせ一生ものだからな。君は何か希望はあるか？」

男の子は首を横に振る。

前世の世界の子どもならヒーローアニメの主人公の名前とか欲しがりそう。この世界にそれはないから絵本の主人公とかがいいのか？

一度も絵本の読み聞かせを真剣に聞いたことがないので名前なんてわからんが。それにしても主人公……………主人公ねえ。

「……あ」

俺はこのとき、ようやく彼に出逢った頃から引つかかっていたことの正体に気がついた。

『漆黒の髪と深海のような濃紺色の瞳。男にしてはずいぶん可愛らしい顔付き』

「ゆいしちゅ」

「え」

「ん？」

「あらー？」

「ゆいしちゅ」

そうだ！ この子は姉ちゃんの好きな小説の主人公にそっくりなんだ！

あースッキリした。この子を姉ちゃんに見せたら喜ぶだろうな。推しにそっくりな容姿の人間が現実にはいたらやっぱり好きになるんだろうか。

「ルシオン!!」

「……………!!」

それなりに肝の据わっている俺ですら悲鳴をあげる寸前までいった。椅子が勢いよく後ろに倒れる。

ただでさえ体格のいい父さんが突然大声で叫びながら高い高いをしてきたのだ。

普通の子どもだったら号泣越えて気絶してる。

「今喋ったのか!? 喋ったよな!」

「あらあらー、今日はお祝いねえ」

「すぐお祝いの準備に入ります！ 今晩はご馳走ですよ坊ちゃま！ 楽しみにしてください！」
走っていくリッツェの背中を、父さんに持ち上げられたまま虚しい気持ちで見つめる。

あーあ。思わず喋っちゃったよ。せつかく男の子が秘密を守ろうとしてくれたのに自分でドジを踏んでどうすんだ。

「ところでルシオン、今なんて言ったんだ？ 父様か？ 父様って言ったのか？」

「うーん。母様じゃないかしらー？」

どうやら子どもの滑舌では言い表せなかったらしい。独り言みたいなものだし別にいいか。それにしても面倒な問題が出てきたな。この人達、子どもがどっちを先に呼ぶかで争うタイプか。これから熾烈な名前呼ばせ競争が始まりかねん。

「ユリシス」

俺とは違う綺麗な発声だった。同じ子どもだからなのか、俺の言葉を聞き取るのがやっぱりうまい。

「僕、ユリシスがいい」

珍しく強い意志が込められていた。いつも覇気のない様子だったのに、今は堂々としていてフォークを握った左手には見てわかるほど力が込められている。

「ユリシスカ。もしかしてルシオン、今そう言ってたのか？」

高い高いが終わり、普通に胸の高さで抱っこされる。父さんはまっすぐ俺の目を見て、明らかに返事を期待していた。

喋れるとバレた以上、無視するのも申し訳ないのでうなずこうとすると、先に男の子が返事をした。

「そう言ったよ。ルシオン、そうだよね？」

男の子は父さんの横に行って純真無垢な笑顔で俺を見上げる。コクンとうなずくと、何がそんなにうれしいのか整った顔をさらにクシャクシャにして笑う。

なんか申し訳なくなってきた。別に俺が考えたわけじゃないんだ。

それどころかその名前、BL小説の主人公のもので、姉ちゃんが言うには『総受け』とかいう能力？ 属性？ みたいなものを持つてるらしい。

あんまりわかってないけど、いろんな人から愛されるとかなんとか。まあ、いろんな人から好かれて悪くはないか。

「……………だ、だめだ！」

突然父さんが男の子に背を向ける。俺を隠すように大きい身体を必死に丸めている。

「ルシオンは誰にもやらん！ 結婚なんて永遠に許さん！」

急になんの話をしてんだ？ そもそも俺達男同士。恋人ならまだしも結婚は法律上難しいんじゃない？

「もー、あなたったらー」

そうだよ母さん。言ってやって。

「ルシオンのお嫁さん姿、きつととっても可愛いわよー。私は今から楽しみだわー」

いかん。母さんが筋金入りの天然だつて忘れてた。

「結婚……僕とルシオンが……」

ド天然夫婦のせいで、男の子改めユリシスがなんだか深刻な顔をしている。

安心してほしい。俺に恋愛をするような気力はないからさ。

数日後。

「それいやだ！ 絶対いやだ！」

ハサミを握ったリッツェから逃走したユリシスが俺の後ろに隠れる。体格差があるため、実際は何も隠れていないが、悲鳴に近い声をあげて嫌がる子どもを追いかけられるリッツェではない。

事の発端は数分前。いつも通り自室のカーペットに座り込んでいると、リッツェに抱っこされたユリシスがやってきた。

「坊ちゃまが一緒でしたら髪の毛チョコチョコできそうじゃないですか？」

リッツェはそう言うのと、俺の側にユリシスを下ろして散髪の準備を進めていく。その光景を見ている間は大人しかったのに、リッツェが耳横の毛にハサミを当てようとした途端、急にグズり出したのだ。

ハサミが怖い？ それにしては、リッツェがハサミを握っているときは大人しかった。だとしたら、髪の毛を切られるという行為自体にトラウマがあるのか。

どちらにしても髪の毛なんて必ずしも切らなければいけないものではない。リッツェもそう判断したのか、いさぎよく片付けを始めた。

衣服も食事とも俺と同じくそれなりに上等なものを与えられているのに、なぜ髪の毛だけ伸ばしっぱなしなのか疑問に思っていたが、こういう事情があったわけか。

俺の背中に隠れている（つもり）ユリシスはリッツェがハサミを手放しても震えたまま顔を上げない。それでも俺が遠慮なく身体を後ろに倒してもたれかかれば、足を開いて間に座らせてくれた。

「リッテ、ユーリにリボン」

「そうですね。前髪だけ縛りましょう。ユリシス、それならいいですか？」

やっぱり前髪を縛るのは問題ないようだ。大人しく青色のリボンを蝶々結びされている。

ちなみにユーリというのはユリシスの愛称。俺が勝手に呼び始めた。自分で言い出しといてなんだが『ユリシス』って幼子が呼ぶにはかなり難易度が高い名前だ。

「ルー、今日も日向ぼっこ行く？」

ユーリが俺の顔を覗き込むと、まとめられた前髪がピョコピョコ揺れる。なかなか可愛らしい。俺が愛称で呼び始めてからユーリも呼び方を変えた。お揃いがいいとかなんとか。

そういえば、ユーリの『ルー』呼びを聞いた父さんが倒れかけるといふプチ事件があった。あだ

名呼びなんて子ども同士じゃよくあるのに、父さんはどうしてか俺達の仲を疑っている。

まだ俺は二歳。ユーリの正確な年齢はわからないけど、まだまだ子ども。この国では年齢性別関係なく結婚できるようだが、それにしたって早すぎる。

安心して父さん。俺がどんなに成長しても、無気力がすぎて歩くことすら嫌がる人間をもらってくれる猛者はそうそう見つからないさ。だからどうかなるべく長く俺のことを可愛がって。

「ルー寝てるの？」

寝てないけど。瞼が重くて開かない。寝たい。

「失礼します」

三回のノック音のあと、聞こえてきた生真面目そうな声に重たかった瞼がパチリと開いた。

「エド先生こんにちはー！」

「こんにちは。ルシオン様、ユリシス様。本日も診察させていただきます」

そうか。今日は診察の日か。白衣に身を包んだエド先生はいつも通りリッツェにも丁寧にお辞儀したあと、カーペットの上でくっついて座っている俺達の側に来て膝をつく。

「ルシオン様、お喋りができるようになったそうですね。焦る必要はありませんので、そのまま自分のペースで成長なさってください」

子どもに寄り添う優しい言葉とは対照的に表情は微動だにせず感情も希薄。俺に触れる手も事務的で、生まれたときから診てもらっているが、ただの一度も頭を撫でたり抱っこしたりはしない。

それは今日も同じでエド先生は俺の両脇に手を差し入れると、持ち上げて体重を量る。

「ルー！」

「すみません。すぐにお返ししますから」

返すて。俺、別にユーリのものじゃないんだが。

ユーリもユーリで悲しそうに目を伏せないで。今生の別れじゃあるまいし、なんなら目の前にいる。

とは思っても口に出すのは面倒くさい。

難なく体重を量り終えたエド先生は約束通りユーリの足の間に俺を戻すと、リッツェの方を向き直った。

「やはり軽いですね。年齢を考えると、身体が細く小さい。健康を損なうほどではありませんが、このあとまた料理長さんとメニューの相談をしてきます」

「やっぱりそうですね。坊ちゃま全然食べてくれないし、なんならお昼も起きずに眠りっぱなしなんですよ。いざ口に入れても噛んでくれないんです！」

「咀嚼が苦手なんでしょう。珍しいことではありませんが、練習させないわけにもいきません。噛みやすいもので栄養を摂ってもらい、食べやすい味のもので噛む練習するのが良いかと」

いやーなんか悪いね。赤ちゃんみたいに世話かけちゃって。気のせいかそこの赤ん坊より手がかかっているような……気のせいか。

その後も手やら足やらを動かされ、未だにハイハイすらしない俺を細かく確認したあと、ユーリの診察に入った。

「ユリス様、失礼しま……」

「ルー！」

いや、だからなんで俺に引つ付くんだ。体重量れないだろ。

まあ甘えたい年頃なんだろう。屋敷で一番年が近いし、ほかは自分より一回りも二回りも上の大人ばかり。気楽でいられないのもわかる。

「うう……」

結局リッツェが俺を抱っこして無理矢理引き剥がし、エド先生の体重測定が終わると、ユーリは怒るところかいじめてしまった。

「はーいユリス。坊ちゃまですよー」

リッツェはうずくまっているユーリのすぐ側に俺を下ろす。

つまり俺にユーリをあやせと。それは世話係としてどうなんだ。ちょっとは自分であやす努力をしろよ。

「ルー、日向ぼっこ行こ？」

ユーリが涙声で俺の手を握って誘ってくる。

異論はないので無言でうなずくと、なんと小さな身体で俺を抱っこした。不格好ではあるものの、なんとか持ち上げられている。腕を回された脇腹が痛いけど。

いやーそれにしても見た目の割になかなか力持ちじゃないか。でもこれで外まで行ける？ 途中で落とされる可能性大。わはは。

「わー！ ユリシスすごい！ 頑張れー！」

頑張れじゃない。なんで笑顔で見送ってる。せめてついて来てよ。

という視線をリッツェに送りながら、不安定に抱っこされた状態で部屋を出た。

広い屋敷の二階から階段で下まで下り、そこから外へ出て庭園の奥にある芝生エリアまで行く。当然二歳児を抱いた五歳児（仮）が歩むにはレベルが高すぎる。というわけで。

「やだ可愛いー！ ユリシス様頑張れー！」

「大人しく抱かれてる坊ちゃまも偉いわあ」

「坊ちゃまは誰に触れられても怒らない寛大な御心を持つてらっしゃるから！」

「あの、これ隠れる必要がありますか？ それに私までついて行く必要はない気がするのですが」

「そんなことおっしゃらないで！ 坊ちゃまが怪我したらどうするんですか!？」

「その前に怪我させないようにしないとだめよー」

「奥様ご安心ください。何かありましたらすぐに私が対応いたします」

オタクメイド三人衆。リッツェ。エド先生。母さんと侍女さんまで。皆がゾロゾロと後ろをついてきている。

かなりバレバレの尾行だが、何かに必死になっている子どもは気づかないだろう。実際ユーリは気づいていない様子だ。

「はあっ、はあっ」

数歩進んで止まって俺を下ろし、また持ち上げて数歩進んで止まって……を繰り返している。俺

はされるがままなので構わないけど、ユーリの体力の消費はかなり激しいはずだ。

元々ユーリはエド先生をあまり好いていないようで張り合うことが多々あった。今回も先生が来たから意地になっているのだろう。

大人達はこの状況を完全に楽しんでいて止める気配がない。

俺が止めるか。だってほら、この身体で挑戦したことはないが、多分今すぐにでも歩こうと思えば歩ける。なんなら走れる。その気になればの話だが。

「ユーリ」

「歩かなくていいよ。僕が連れてってあげる」

ユーリの肌には汗が滲んでいる。もうまともな抱っここの形も保てていない。それでもユーリの迷わない声が諦める気などないと物語っていた。

「むりしたらだめ。きゅーけーだいじ」

「うん。大丈夫」

本当に大丈夫か定かではないものの、大勢の大人達が見守っているのだから好きにやらせてあげればいいか。

「……ルシオン様は私が想像していたよりずっと話すのがうまいですね」

「そーなんです！ 坊ちゃま天才なんです。いやー昔から言葉を理解しているふうではあったんですけど、話し始めたらもうしっかり会話できちゃってー。まあ滅多に喋ってくれないんですけどね」

「そうなんですか……」

リッツェお前隠れる気あんのか？ 声でかすぎだろ。エド先生は一応抑え気味の音量ではあるの
で存在に気づいていなければ耳に入らないかもしれない。

「リッツェ、うるさい、ね」

ユーリがつぶやく。

ほら見る。思い切りバレてるじゃん。

そのとき、この旅の最大の難関が現れた。いくつもの段差が続き、高低差の激しい二つの階を繋
いでいる。たかが階段。されど階段。

子どもの視点で見ると岩が剥き出しになった崖くらいの迫力がある。

——ゴクリ。

ユーリの喉が大きく鳴った。すでに疲れ切っているはずなのに俺の背中に回された腕には異様な
ほど力が込められている。

あ。これはだめだ。

怪我をしなくとも俺を落としてもしたら多分一生ものの傷を負う。精神的な方の。

でも難しいのは止め方なんだよなあ。なるべくプライドを傷つけるような真似はしたくない。し
かも大人達があえて止めない理由もなんとくなら理解できる。これっていわゆる初めてのお使い
的なあれなのだ。だとしたらやっぱり止めるのは……

あーやべえ。この状況で眠気が。

考えるの無理。疲れる。だるいとは言わないけどさ。

「ユリス。俺の息子を絶対に落とすんじゃないぞ」

知っている声だ。ただいつもよりさらに低い。高圧的な威厳ある雰囲気をもっている。

そのとき、元々浮いていた身体がもつと高く上がった。でも俺の身体には依然ユーリの腕が回っ
ている。予想外の出来事にユーリも俺も目をパチクリさせた。

ヒーローのごとく現れた父さんは俺を抱いたユーリを軽々持ち上げて、そのまま迷いない足取り
で階下へ下りていく。こっそり俺の足にも父さんの手が回されているが、ユーリには見えていない
はず。

そして意外にも一階に着くなりためらいなく俺達を解放し、ユーリの結ばれた前髪をつついて
言った。

「あとちょっとだ。頑張れ」

我が父、かつこいい。生まれて初めて思った。

いつもデレデレしていて母さんにうまいこと使われてばかりいるけれど、やっぱり一家の大黒柱
なだけあってやるときはやるんだな。

再び一步一步歩き始めたユーリの肩越しに父さんを見る。

「とーしゃま。あーと」

聞こえたか？ ……聞こえたな。声を出さずに大泣きしてるもん。

「やるじゃないあなた。ほら、一緒に見守りましょう」

「ぐすつ、ああ」

なんてこったい。見守り隊員が一人増えちまったよ。この屋敷って暇な人間しかいないのかな。「ちゃんと辿り着くといいんだが。とりあえずつまずきそうな小石は一つ残らず排除して、三メートルごとに給水所を設置しておいた」

……………疲れた。心の中でツツコミすぎて疲れた。なんの変哲もない平々凡々な俺にこの家庭は異色すぎる。もう無理だ寝よう。ごめんユーリ。夢の中で応援してるね。

その日の夜中。

「う…………つ、うう」

自室のベッドで目覚めると隣にはユーリがいた。それ自体珍しくはない。むしろ最近夜中に俺のベッドに潜り込んでくるのが日課になっていた。

ただいつもと違うのは、頭を抱えて身体を丸め、苦しそうに唸っているということだ。悪夢でも見てるか？ とりあえず起こそう、と身体に手を伸ばしたとき、指先にバチツと静電気が走る。まだ触れてすらいらないというのに。

根拠のない嫌な予感が頭を過る。それは突然起こった。

——バチバチバチツ！

電線がショートしたかのような音が先程より何倍も大きく響く。稲妻によく似た光の線がユーリの身体を囲うようにいくつも走っている。

再度触れようとすると、静電気とは比べ物にならない熱い痺れが指先を焼き、咄嗟に手を引いたはずなのにすでに赤くただれていた。

「ユーリ」

「…………さい、うるさい…………」

痛いでも苦しいでもなく『うるさい』。

頭を抱えているのではなく耳を覆っていたのか。

周りを見渡してもいつもいるはずのリッツェの姿はない。最近よく席を外すと思っていたが、やりにもよってこんなときにいないとは。

どう考えても、前世の知識でも対応しきれない事態。慌ててベッドから下りてよろめきながら廊下に出た。

「リツテ、とーしゃま」

子どもの身体ってこんなに走りにくいものなのか？ 走るところか歩くのもままならない。

リッツェがいなくて、見えなくとも近くに必ず大人が一人付いているのは知っていた。芝生エリアで寝ているときは決まって庭師が庭園で仕事をしていて、子ども部屋の向かいには父さんの執務室がある。

幸い今も向かいの執務室の扉から照明の光が漏れていた。

「とーしゃま」

ほんつとに不便この上ない身体だな。焦りがもろに表れて手足が震える。喉がつかえてうまく

叫べない。

前世でも成人する前の若い年齢までしか生きていないわけで、こんな緊迫した状況は初めてだ。焦るなっていうのも無理な話だろ。

なんてウダウダ考えている時間もなく、必死に足を動かして飛びつくように執務室の扉を開けた。「とーしゃまあつ」

執務室には父さんだけではなく母さんや秘書（なのか執事なのかよくわからない人）、メイドさん達まで揃っていた。

執務机とは別に用意されているテーブルを囲み、会議でもしていたのだろう。リッツェだけ見当たらないのはおバカすぎて邪魔になるからだ。絶対そう。それ以外ありえない。

「ルシオン!? 立つ、いや歩いてるのか?」

「ユーリ、ちんじやう」

「ちんじや……?」

一番に側に駆け寄ってきた父さんの服を引っ張るがびくともしない。筋肉質だけあって子どもの力で引いていくのは不可能だ。おまけに赤ちゃん語の翻訳もへた。

「旦那様、こちらです。おそらく魔力暴走かと」

幸い察しのいい父さんの秘書っぽい人が、子ども部屋で起きている事態にいち早く気づいてくれる。父さんは俺を持ち上げて母さんに渡すと、執務室の扉を閉めてユリスの元へ向かう。

ちょ、なんで俺を置いてくんだよ。最初に気づいたのは俺なんだぞ。

「大丈夫よルーたん。子どもならよくあることだもの。あの二人に任せておけば問題ないわー」

母さんは泣いてもいない俺をあやすように揺らしながら執務室内をゆっくり歩く。メイドさん達も母さんの言葉にうなずいていた。

魔力暴走って言うてたっけ。ずいぶんファンタスティックな単語だ。病氣じゃなくてよかったとか、そんな感じのノリで終わらせていいならいいけどさ。

この数秒でどっと疲れたので、大人しく母さんの胸にもたれかかる。見た目に反して力持ちな母さんは片手で抱っこしたままもう片方の手で俺の手首を掴んだ。

「マリ。すぐにエド先生を呼んできてくれる? 調理室にいるはずだから」

「……! はい!」

侍女さんが俺の手を見つてすぐに執務室を飛び出す。

そういえば火傷したんだった。驚きのあまり痛みを感じるのも忘れていたが、指摘された途端ヒリヒリ疼き出す。

ユーリは大丈夫だろうか。全身に電気みたいなのがまとわりついていた。もし本人も火傷を負う現象なら相当な重傷のはずだ。

「……」

あー、まじか。こんなときにも眠くなる。子どもの身体って本当に厄介だ。いやこれは単なる俺の体質だな。自分の無気力さに嫌気がさす。

俺の重みに抵抗しようと試みるが、日頃の自堕落がたたったのかどうにも勝てそうにない。

「とっても頑張ったのね。誰かのために歩けるならそれで十分よ。もう大丈夫だからゆつくりお休み」

母さんはいつもと変わらないゆったりとした口調で話したあと、俺の額にキスを落とした。まるで魔法にかかったみたいに緊張が和らいで、陽だまりのような優しい温もりに包まれる。

ユーリ。ごめんな。起きたらちよつとは……一日三分くらいは歩く練習するからさ。だから起きたら、いつもみたいに紺色の目をキラキラさせて笑ってよ。

あの夜から五日が経った。

いつも通りカーペットに座りエド先生に包帯を取り替えてもらっている間、俺はあくびを零すくらいしかできなかった。

診察を受けている本人がこんなにも大人しくしているのに、俺を抱っこして座っているリッツェと、すぐ隣で怪我していない方の手を握っているユーリは二人して喚いている。

「もう二度と坊ちゃまから離れませんからね！ たとえ世界一の美女に呼び出されたって目も向けません！」

忙しそうだと思ったら世界一の美女に弄ばれてたのか？ あんまり貢ぎすぎないようにするんだぞ。

「ひっく、ぐすっ」

君はいつまで泣いているんだい。あの日からもうすぐ一週間だというのに、隙あらば大粒の涙を

零している。そんなに泣いたら干からびるぞ。

魔力暴走というのは、文字通り体内にある魔力が暴走して勝手に放出される現象だという。しかし自分の魔力が自身を傷つけることはないらしくユーリは無傷で済んだ。

それなのに俺より泣きじゃくっている。自分のせいで俺が火傷を負ったのが余程悲しかったようだ。

「順調に治ってきています。痕も残らないでしょう。ユリス様も落ちてください。精神的な安定が魔力の安定にも繋がってきますから」

そうだぞ。そんなに毎日ビャービャー泣いてるから可愛いお目が腫れ上がっているじゃないか。

「ルー痛くない？」

「いたーない」

「痛いんだあつ!! わーん! ごめんね、ごめんねえええ」

痛くないって。動揺しすぎて理解力がいつもの半分以下になっちゃってる。

「ユリス様、落ち着いてください」

「わーん! 坊ちゃますみません!! 僕が側に付いていなかったばかりにー!!」

「り、リッツェさんも。大丈夫ですから」

お前も泣くのかよ。ユーリに負けじと声をあげて泣くリッツェ。泣くのは別にいいけど、お腹に回っている手に力を入れるのはやめてほしい。指先よりお腹が痛い。吐きそう。

いつも冷静なエド先生もどうしたらいいかわからずアタフタしている。